

貞門俳諧における付合観の一考察 ——取成付を中心に——

一、はじめに

近世俳諧の嚆矢として本格的に連歌から俳諧の独立性を希求したのが貞門俳諧である。松永貞徳は『天水抄』（寛永二十一年成）^①のなかで、

俳諧も和歌に狂歌の替るごとく、連歌とふりかへて句作りをもする事也。此心持を上手といひ、又連歌のやうにするをよしと思ふハ下手のくせ也。

と述べており、俳諧においては連歌とは異質な句作を追究していた。更に貞徳と同門ではないが、斎藤徳元も『俳諧初学抄』（寛永十八年自奥）^②において、

凡俳諧句躰ハ、連歌に俗語を加て前句の詞をあらぬ品にとりなして付侍るさまなり。

と述べており、俗語を積極的に用いるのみならず付合のあり方の面においても連歌と違う行き方を目指していた、という事を看取できる。そこで問題となるのは貞門俳諧の付合観とは具体的にいかなるもので

鈴木 敬 寛

あつて、従来の連歌と引き違えて付合においてどのような方向性を目指したのか、ということである。本稿は連歌から受け継がれた「取成付」の手法の考察を通じてその一面を考究しようとするものである。取成付とは連句における付合手法の一つで、『俳文学大辞典』の「取成」の項（寺島樵一氏執筆）によると「付合における前句の意味の転換の手法。同音異義語による前句の意味の転換である「詞の取成」と、前句の場面や動作の主体を転換ることなどで転換する「心の取成」がある」と定義されている。この取成付は「詞の取成」「心の取成」を問わず、先に挙げた徳元だけでなく貞門俳諧全体において重要視された手法であったにも関わらず、従来の研究においてはそれ自体として具体的な内実・運用について考察を加えられたことが少なく、後述するように遣句・軽口を中心とした連歌や談林俳諧の立場からなされた否定的な評価——特に本稿で中心に取り上げる詞の取成について——をそのまま追認する論調が中心であった^③。本稿は貞門俳諧の詞の取成についてその実例を観察することを通して連句文芸としての独自性を掘り下げ、そしてそれを前代の連歌——特に紹巴連歌——や談林俳諧におけ

る付合の性質及びその評価のあり方との差異を把握する事を目指し、ひいては連句史における貞門俳諧の位置づけを再考しようとするものである。

二、取成付を採り上げる理由

ここで取成付を採り上げる理由としては、安原貞室が『俳諧之註』(寛永十九年刊)⁽⁴⁾において、

(仏師の袖の涙あひなき)

絵所の縁ハいつしかさだまりて

きりちがへて付たり。仏師―絵所と云つけたるか。「絵所の

縁」、重詞なり。

杉さうじまで出来る造作(三ウ六句目)

縁つゞきに杉障子あるもの也。必、絵を書所なり。「定りて」と云にハ、造しめたる心にて付たり。此句ハ取なし也。俳諧ハ

取成付を宗とすべし。連歌のいきハ本意ならざる也。此百句ハ

新きやうに、と斗心得待る故、取成の付合をあまりえせず。又、

いかに取なしを宗にするとも、木に竹を継たる一句ハこのま

ず。其上、毎句に取成て四手くすとすれば、一寸法師の縁の下

をくぐるやうにて句姿すくミ侍るもの也。うすくこくまじへて

付べし、用付さへ一鉢なり。増て、よき諸の鉢を捨て一ミちを

好まん hands づゝの仕わざにや。

れていた、ということ⁽⁵⁾が挙げられる。ここで貞室が取成付であると認定している箇所は前句の「絵所」「縁」という詞であり、打越と併せては「(絵) 仏師」の「袖の涙」を恋の悲しみの涙から良縁に恵まれた嬉し涙に見替ることで恋が成就したことを述べている事になる(「絵所」は単なる「仏師」のあしらいであり「縁」を出す為の序)が、付句と併せては「絵所」が「絵を描く材(具体的には杉障子)」に、「縁」の意味が「男女の仲」から「(建物の) 縁側」という意味にそれぞれ転換されており、縁側で繋がっている絵を描いた杉障子を立てるところまで普請も進んだ、というほどの意になる。このような付け方こそが取成付という付け方の手法である。無論、この自註からは貞門俳諧においても取成付は「宗」とすべきでありながら決して新しい行き方はなかったことや、取成付ばかりで進めては付筋が窮屈になる上に句姿も悪くなるというデメリットも認識されており、それを打開するためには禁制(用付)を犯す事さえ許された、ということをも読み取ることが出来る。だがあくまでも取成付が中心的な役割を果たすことが庶幾されていたのは動かない事実で、むしろここで注目すべきは「連歌のいきハ本意ならざる也」という箇所であり、「宗」とすべき取成付は「連歌のいき」とは対照的な付け方であると捉えられていた、という事である。取成付と「連歌のいき」を比較検討する事によって貞門俳諧が付け合において従来の連歌―あるいは「連歌のいき」―と比して重視した点や彼等独自の付け合観の把握に大いに寄与すると考えられる故である。そこで、まずは「連歌のいき」なるものがどのような付け方を指すのか検討する必要がある。

三、「連歌のいき」について

三・一、「連歌のいき」の定義

「連歌のいき」の概念については、松江重頼の『毛吹草』（寛永十五年序）⁽⁶⁾からの次のような文言が参考になる。

百韻連歌の時も、誹諧躰とて少々有之よし、しからは誹諧にも連歌躰有べし。句なミをもくきたりたる時ハ、連歌いきにてかろくくとさきへやらるべし。あやうきはいかい付よりまさるものぞ。

即ち、「連歌のいき」とは「かろく」と付合を進める手法であった。

また、乾裕幸氏⁽⁷⁾が宗牧の『当風連歌秘事』（天文十一年奥）⁽⁸⁾および脩竹堂の『俳諧或問』（延宝六年跋）⁽⁹⁾の次のような一節、

付にくき連歌をやすくとかろく付るを拍子と申也。（中略）又

其座に禁句出来候ハ、取あへず早々に可付事肝要候。其拍子也。

此時ハ少々の指合もくるべからず。

（当風連歌秘事）

前より云ひもて来り、入ほがになりて何ともさきへゆかぬ時は、一座興をさまして退屈す。かゝる時に前になづまずはなれず、後の句に助有やうに云ひやるをやり句といふ。

（俳諧或問）

を引きつつ「この拍子は遣句の意にはかならない」と指摘されていること、それに二節で引いた『俳諧之註』の自註を鑑みると、「連歌のいき」とは、

(一) 取成付とは対照的な付け方である

(二) 貞門俳諧においては「本意ならざる」付け方である

(三) 「かろく」とした付け方であり、遣句に相当する

と言えよう。また、先に挙げた乾氏の論によると「連歌のいき」とは宗牧の「付にくき連歌をやすくとかろく付る」という付け方を指すことになるが、斎藤義光氏が指摘されている⁽¹⁰⁾ように、このような付け方は紹巴の最も得意とするところであった。したがってより端的には「連歌のいき」とは遣句を多用する紹巴連歌の付け方を指す、と見てよからう。ちなみに「連歌のいき」の「いき」については、紹巴連歌は一卷全体で遣句を多用していた⁽¹¹⁾こと、それに対して後述するように貞門俳諧は取成付を多用していたこと、さらに(一)を踏まえると、これは「行き」であり「行様」を指す、と見るのが穏当であろう。よって、以降は「連歌のいき」は端的に「紹巴連歌の行様」を指すとして論述を進める。

三・二、「連歌のいき」に対する貞門俳諧の評価

貞門俳諧の「連歌のいき」への視座については、二節で採り上げた『俳諧之註』の記述はひとまず措くとして、三・一節冒頭に引いた重頼の文言が示唆的である。これによると「句なミをもくきたりたる時」には「連歌いきにてかろくくとさきへやらる」ことが望ましく、その頻度としては連歌の百韻の中に「誹諧躰」として少しばかり異体の句がまじることがあるのと同程度であり、それは俳諧の側から見た場合の異体の句たる「連歌躰」として捉えられるという。また、「連歌の

いきは本意ならざる也」と発言した当の貞室は、同じ『俳諧之註』の中で次のように述べている。

関をくりにやしめるさかもり

涼かぜの手にく縮る河柳

みづの出バナハしがらみもなし（初オ折端）

俄に水出てしがらミもなき故に、おりふし河辺にある柳の枝などを折て「是にてなり共」とさハぐ躰なり。（中略）八句

目のいきやう、連歌の作法に準じてかるくとするなり。

ここでの付筋は自註によると、打越—前句における関送りの餞別（12）の酒盛りの躰から、急な出水に遭つて人々がそばの柳の枝などを折つてしがらみにしようとして慌てふためいている躰に転じたとの事だが、このような付句が「かるく」とした行き方だという。更にここではもう一点、「八句目のいきやう、連歌の作法に準じてかるくとする」と述べている事が注目される。この「連歌の作法」は細川幽齋から紹巴、そして貞門俳諧へ受け継がれた行き方で、それは次のような言説が物語っている。

第三八人ならバ聲のごとくにて他家に待るゆへに、独立て下心ばかり付て一句長高く仕事也。四句目八句目ハ軽々と仕候也。

（細川幽齋伝授 連歌伝書（13））

第三は相伴の人のごとし。長高く幽玄なるを興ずる也。（中略）八句目ハ詞つまりぬる故に。唯何となく、かるくと其躰もてやり候を八句目ぶりといふ也。

（紹巴 連歌教訓（14））

第三之事。発句・脇を天地にかたどりて、第三八人道と又はじまる心也。しかるゆへに脇の心を転じて、亦さすがはなれぬやうに発句に対しむかふやうに、一作たくましく長高くあるべし。（中略）八句め面の末座なれば、位ひくき心持にていかにもかるくすべしと也。

（安静 誹諧打出小槌（15））

貞室の「八句目のいきやう、連歌の作法に準じてかるくとするなり」という発言もこのような伝統が背景にあつてのことで、ここで「かるく」と付けたのはあくまでそこが八句目だから、という消極的な理由からであつて、「連歌のいき」を重視していたから、という積極的な理由からでは決してなかつた、ということがひとまず言える。加えてこの一連においては禁制が犯されている、という事も注目される。即ち、水辺の前句に「みづ」という詞を付けるのは明らかな用付（16）であるが、それにも関わらずそのように付けたのはやはり式目よりも幽齋以来の「八句目のいきやう」が優先したためで、つまりこの付句は「百韻全体の中における行様」という外的要素を加味しても貞門俳諧における「かるく」とした付け方の典型を看取するのに好適な例だと言ふ事が出来る。而してその内実は付筋としては見替えに近いが、付筋としては用付をも許容した遣句躰のものであり、三・一節の末尾で述べたようにやはり紹巴連歌の「心のとりなし」に近いものと言うことが出来る（17）。

また、北村季吟は『誹諧用意風躰』（延宝元年識（18））の中で次のように述べてはいるが、これとて軽々と付けることを積極的に評価した

発言とは言い難い。

すべて付心に重きあり。軽き有。麁相なるあり。中にもかろぐとせん事ハ上手のしわざにや侍らん。はいかいハよく付たるが誠によけれ共、あまりにつけんとすれバ前句の道具をひとつつゝひろひてつけ侍る故に、わが一句のさまくだくしく正意かたハラになる事おほし。

曰く、「はいかいはよく付たるが誠によけれ」ども、それが行き過ぎになると往々にして「わが一句のさまくだくしく正意かたはらに」なつたという。そうした事態を打開するのに「かろぐとせん事」が「上手のしわざ」であつた。しかし一卷全体で遣句中心の行様を志向していたとは言つておらず、むしろこれは二節で挙げた『俳諧之註』の自註「毎句に取成て四手く」とすれば……と通じ合うものである。結局、貞門俳諧における「かろぐ」とした付け方はあくまで意味付の句が続いて詞に詰まつた時に打開する為の方便であつた、ということが穏当であらう。

三・三、「連歌いき」と談林俳諧の軽口との関係性

「連歌のいき」について考察を加えた所で、談林俳諧における軽口・寓言との関係性についてしばらく述べておく。三・一節で挙げた『俳諧或問』の文言からも窺えるように、この両者については非常に近接した関係にある事が尾形仇氏によって夙に指摘されている⁽¹⁹⁾。即ち、西山宗因の「軽口の本質」が「彼の俳諧の技法の根柢に、彼がその本領とした連歌の軽妙な呼吸が深く浸透してゐた」こと、また貞門俳諧

で言う所のいわゆる俳言説に通じるような次のような文言、

連歌の付はだへを考えて、心の助とも為べし。俳諧の情と相ちがふとはいへども元来ワかたぬ類、連歌に俗語をまじへたれば俳諧也。

(炭翁 俳諧染糸⁽²⁰⁾)

については、貞門俳諧が外面的規則の上から説き起すのに対し、談林俳諧からすると特に「付はだへ」について言っているという事になること、つまり談林俳諧が本質的に即興性・速吟性自体を俳諧としての生命としていた⁽²¹⁾ことを確認しておかなくてはならない。そしてこの時、「かろぐ」と付けるという営為が連歌・談林俳諧の側と貞門俳諧の側とは意味合いが大きく異なる、という点も見逃せない。前者の場合における「かろぐ」とした付け方は本質としての付肌・場の空気の問題であるが、後者の場合におけるそれは禁制や一句立の問題であり「よく付たるが誠によけれ」という行様からの緊急避難的な意味合いしか持ち得なかつた。これは三・二節に述べた通りであるが、後述するようにこれが貞門俳諧と談林俳諧の俳諧性の評価についての本質的な差異であり、またそれが両者の対立点の極地であつた事に思いを致す⁽²²⁾時、

取なし付の事、古来よりいたし候処に、只今御とがめ合点まいらず候。奉行の曰、「それ取なしといふハ前句をあらぬ事にいひ習て当句の分に用ゆるゆへ、前句つぶれて爰にて切ればなれ続かず」。連・俳共に上下の句を合一首とする所に、とりなしにてハ一首の埒聞へざるもの也。

(松意 夢助²³)

とりなしの句、百韻に壹句二句八くるしからず。如何といふに、心行の正躰を失ふ故也。しかれ共よくかなひたるは片点もあらず、「壹句二句まで」といふは初心のためなり。

とりなしの句

うらミられてハ大津へ罷る

紙子にはもミを打出の親の前

此付心、前の「うらミ」を紙子の裏にも見付、親の前へ来て出るに達手ななりなれば、親見とがめんことをとりなして付たり。是俳諧の道にあらず。

(西国 引導集²⁴)

という談林俳諧の側からの取成付に対する否定の言辞の質も自ずから了解されよう。「かろく」と流れる遣句中心の座においては、前句との意味的連関において本質的に断絶が生じる取成付は招かれざる客であった。

こうして貞門俳諧から見た「連歌のいき」の評価をまとめると、具体的手法としては紹巴連歌や談林俳諧におけるような遣句いきを指し、その運用の評価については「よく付たるが誠によけれ」とする貞門俳諧の行き方全体のなかでもとより中心とすべきものではなく、行きなすんだ場合等は消極的ながら許容する程度のものであった、となる。これらは二節冒頭で『俳諧之註』の文言から「連歌のいき」が「取成付とは対照的な付け方である」とした部分とも通じるものである。この取成付に対する評価の差異については次節以降で更に述べ

る事とする。

四、「取成付」をめぐる諸言説の検討

四・一、連歌における取成付

次に取成付について検討する。連歌における取成付の評価については既に両角倉一氏が『新撰菟玖波集』の付合を例として考察²⁵しており、本稿冒頭で引いた『俳文学大辞典』の記述同様「詞の取成」と「心の取成」があるとし、このうち前者については「同音異義の取成付」と「同語異義の取成付」に分類している。二節で採り上げた貞室の付合などは「詞の取成」に該当し、後者および「心の取成」は所謂見替と見ることができ、本稿においても両角氏のこの分類を踏襲し、貞室の言を鑑みて「同音異義の取成付」について考察を進める。

この「同音異義の取成付」(以下、単に「取成付」と記す)については夙に宗祇が言及している。

取なしの連歌とて、近年其類多候。宗砌などの仕候句にもおもしろからず侍也。其外人の仕たるに大略あしきのミ候、たとへば「狩人」と云句に「稲葉」「蘆」など付候事、大不可然候。

(『長六文』²⁶)

ここでは取成付は「大略あしきのミ候」と、基本的に否定的評価が下されている。実作においても、例えば次に掲げる『湯山三吟百韻』の宗牧注(天文七年成)²⁷には、

老てや人は身をやすくせん

祇

こえじとの矩もくるしき道にして 柏

雪ふむ駒のあしびきの山 長(三才十二句目)

此寄様、皆とりなせる句也。山路の雪になづみて駒もこえがた

き心を見せて「駒の足引」とつゞけられたり。「こえじとの」

といふ詞にあたる所、奇妙也。取成句ニハ秀逸なき様に申侍れ

ど、様による事也。(後略)

と述べられており、取成付では優れた付句が出来することは稀である、

と考えられていたことが分かる。ただし両角氏が『新撰菟玖波集』²⁸⁾

所収の次の五連、

みはなき物のなにかくるしき

山ぶきの花やいくえもおりてみむ(巻第二、法眼紹水)

おきて身づからむすぶあかつき

色つらき花田の帯のきぬづくに(巻第八、宗御法師)

こえじとののりもくるしき道にして

雪ふむこまのあしびきのやま(巻第十二、宗長法師)

そこともしらぬ海の中みち

たれか見し名にこそ龍の宮こなれ(巻第十五、法眼專順)

あまりしのぶも人やあやめむ

昔ハといふさへまれになりはて、(巻第十七、肖柏法師)

を挙げて、これらを「同音異義の取成付」と認定し、「以上五連のう

ち長連歌の原拠の確認できたもの四連(專順の一連以外)引用者注)

は三句のわたりがいずれも異種の題材の連結部分で、とりなし付に

よってはげしく変化している事が注目される。二句間の機知的表現と

いうだけではなく、変化をよしとする長連歌の行様にかかわる点もあ

るのであろう」と指摘されている²⁹⁾事も加味すると、連歌において

は取成付は基本的にはあまり歓迎されるべきものではなく、そこから

秀逸な付句を将来することはなかなか難しい、といった否定的な見解

がとられてきたけれども、句境転化の手段の一つとしては一応認めら

れていた、と言える。そうして次代の紹巴においてはうって変わって

取成付が多用されるようになり、前代の連歌に比して展開を速める手

段の一つとして遣句とともに重要視された、ということが斎藤義光

氏³⁰⁾によって指摘されている。紹巴自身、『紹巴教書』(成年未

詳)³¹⁾の「取成の躰」との名目中で、

車もミつの子を思ふ道

行名残大井の宿の雪の日に

前ノ句、三車火宅の心也。付所ハ、源氏物語に明石姫君の母の、

大井に住給へる所より三年にて都へ出て紫の上の養君になり給

ふ雪の朝、源氏の都へつれて出給ふを、は、の悲しみの所二三

車の仏子にとひ合らるゝ事、誠に奇妙なる物にや。殊に取成の

句一大事なるものにや。

という用例と解説を掲げており、前句の法華経・譬喩品の火宅の逸話

に由来する「羊車・鹿車・牛車の三つ」という意の「ミつ」を源氏物

語の本説取りによって「三歳」という意に取り成したこともさること

ながら、「殊に取成の句一大事なるものにや」と明言しているところ

が前代までの連歌師と大きく異なっている。実際、彼の自註付き独吟

千句である『称名院追善千句』(永禄六年成)³²⁾においても取成付と

認定できる用例は十四例にのぼり、平均して百韻毎に一回以上は取成付が用いられていた事になる。いくつか例を挙げると、

せめてさハ忘がたミの花も哉

摘もすミれの露もろき袖（何人第三・脇）

「かたミ」を「筌³³」に取成畢。露ながらミし花の忘がたき、

と也。（「形見」―「筐」）

跡はいま猶ふか草と萌出て

月かたふけバともしさすかけ（何田第六・二ウ折端）

「もえ出て」を、火のもえ出るに古来取成り。夏山にともしさ

しすて鹿をとる、と云也。（後略、「萌」―「燃」）

月ハ冬木の中に澄かけ

むさ、びの明るも知ぬ声ハして（何路第八・四才五句目）

冬木の中に驢の住に取成り。あけてハ声せぬ物なれ共、月明に

て明るをしらで鳴成べし。（「澄む」―「住む」）

といったものが挙げられるが、自注を閲しても取成付に対する躊躇が全く見られない点が注目される。即ち、前代の連歌師達に見られた否定的評価が紹巴においては皆無であり、それが紹巴連歌の一特徴をも成しているのである。これは先の『紹巴教書』の文言と呼応する現象であるが、遣句中心の平明な行様の中で「既成の寄合や詞の縁に頼らずに、前句を意外な方向に展開させようとする」³⁴ことを実現させるために紹巴が意識的に取成付を用いていた、ということを実付けけるものである。次節ではこれらを踏まえ、紹巴の取成付に対する斯様な態度がその門人であった貞徳にどのような影響を及ぼしたか、につい

て考察を進める。

四二、貞門俳諧の取成付の用例検討

貞門俳諧における取成付は、紹巴連歌に比してもより重要な付合の手法と広く認識されていた事は疑いを容れない。徳元は『誹諧初学抄』で、

連歌付・誹諧付とて二筋有。たとへバ、「めぐる」と云句に「月日」又ハ「時雨」「車」など付るハ連歌付也。誹諧にハ「六十六部」「八丁がね」「ろくろ」「つるべ」など付べし。同、「法」と申句に「舟」「馬」「駒」「車」などハ皆是連歌付也。其上めづらしからず。誹諧ならバ、「かみぎぬ作る」「障子をはる」又ハ「ふくろう」など付べし。併、連歌に付来れる詞を無用と云にはあらず、本の事を面白おかしくとりなしたるハ猶以珍重たるべし。

とも述べており、従来無かった新奇な俗語同士の付合よりも付合語同士の雅俗の位相の落差に由来するおかしみを生む付筋を「誹諧付」として「猶以珍重」である、と重視していた³⁵事が知れる。即ち、貞門俳諧では連歌で使い古された詞を否定するものではないが、そのような詞をこそ「面白おかしくとりな」す事が希求されていたのである。そしてその事実は自然、貞門俳諧が取成付に傾斜していったであろう事を容易に推測せしめるであろうし、又この事は四・一節で述べた紹巴の取成付観を更に一步進めたものである、とも指摘できよう。

実作における貞門俳諧の取成付の運用の吟味には註や点の入った文献が参考になる。ここで対象とする文献は『称名院追善千句』との比

較、また紹巴―貞徳―貞室の師系を念頭に置いて貞徳か貞室の独吟百韻、又は千句とする。具体的には貞室の『俳諧之註』、『誹諧独吟集』（寛文六年刊）³⁶所収の正章独吟百韻、『新独吟集』（寛文十一年刊）³⁷所収の正章独吟追善百韻、『新統独吟集』（延宝三年刊）³⁸所収の貞室独吟百韻、貞徳加点の『正章千句』（正保四年識、慶安元年刊）³⁹、そして貞徳の『貞徳百句独吟自註』（万治二年刊）⁴⁰および『貞徳誹諧記』所収の貞徳自註独吟百韻を調査する。その結果、取成付の使用回数に関して次のような結果を得られた。

『俳諧之註』…五句 正章独吟百韻…四句

正章独吟追善百韻…三句 貞室独吟百韻…七句

『正章千句』…四二句 『貞徳百句独吟自註』…二九句

貞徳自註独吟百韻…一一句

これらにより、貞門俳諧における取成付の頻度は紹巴を含む連歌の取成付のそれとは比較にならないほど高率である、とすることができ。また『正章千句』については貞徳が加点していることは先述した

通りだが、取成付の頻度及び長点数との関係についてより細かく各百韻を見渡すと、次に示す図表のような結果⁴¹が得られた。ここから、(一)『正章千句』の付句一〇八九句中、取成付の付句は四二句であり、その出現確率は約四％である

(二) 四二句の取成付の付句のうち二六句は長点がかけられており、その割合は約六二％である

(三) 付句の長点句一六五句のうち二六句は取成付が占めており、その割合は約一六％である

と言う事ができる。同じ千句という事で『称名院追善千句』と比較してみても(一)により『正章千句』における取成付の出現頻度は四倍近くにのぼることが確認できるし、(二)からは取成付が長点を得られる確率が六割程度と非常に高かったこと、(三)からは貞徳が付句に長点をかけるにあたって取成付の付句を相当程度重要視していた―殊に第二・第九・追加の百韻でこの傾向は著しい―ことが判明する。これらの結果は貞室の「俳諧ハ取成付を宗とすべし」ということばを

百韻	長点数	取成付数(長点)	割合(%)	百韻	長点数	取成付数(長点)	割合(%)
第一	一三	三(二)	一五	第七	一三	二(一)	八
第二	一六	五(五)	三二	第八	一九	六(三)	一六
第三	一五	二(一)	七	第九	一五	九(七)	四七
第四	一六	二(〇)	〇	第十	九	四(〇)	〇
第五	一四	二(一)	七	追加	一六	五(五)	三一
第六	二〇	二(一)	五	合算	一六六	四二(二六)	一六

数量的に裏付けるものと言えよう。

次にこれらの文献の取成付の用例を挙げ、内容面について考察す⁽⁴²⁾。まず句境転化に取成付が作用した例を挙げる。

A 反魂香を霧とたてつ、

くもるらんほんの月より胸の月

もちこすこれの嫂ハ寝びえき

(正章千句・第九初冬落葉・初ウ十二句目)

B 油烟にて腕にハ御名を入ほくら

まぶと定ていとしがる中

よき山とかねて見しれる堀子共

(新統独吟集・貞室独吟百韻・名オ七句目)

これらは共に恋離れの取成付である。Aでは、打越―前句で漢の武帝と李夫人の故事を念頭に置きつつ胸も曇るばかりの恋の物思いが描写されているが、心境を表す詞である「胸の月」を「胸につかえる」という意の「胸のつき」に取り成し、「もちこす」⁽⁴³⁾という詞を併せる事によって、泥酔し二日酔いになったしどけない女の態様を描いている。ここでは一応「嫂」という恋の詞は使われているものの、深刻な恋の病から一挙に諧謔に転じている。またBでは、その名を油煙墨で腕に彫込むほどのめり込んでいる情夫との濃密な逢引の様が打越―前句で成立しているところ、付句では「まぶ(間夫)」を坑道の意の「間府(間分・真吹)」に取り成すことによって鉱山労働の景に一変させている。「中」も「恋仲」という意から「坑道の中」という意に見替られている事も句境転化に有効である点として指摘しておく。

C 余寒の時分棗もぞなき

薄茶さへ小壺に入てすきぬらん

こゝろざしせし日よりはらめる

世俗に、仏事をなすハ「茶を立る」又「こゝろざしをする」

と云也。「小つぼ」を産門にとりなす也。

(貞徳誹諧記・貞徳自註独吟百韻・名オ折端)

D 順の舞ひやうしうらゝに踏出て

山家の雪間まてる上臈

へ谷の戸の余寒に蛛の巢ハ破れ

(正章千句・第二花・初オ五句目)

Cは雑から恋への転化で、付筋は貞徳の自註が示す通り。取成付によってそれが実現されている例である。Dは春季同士の付合であり、一見して大きな変化は窺えないかに見えるが、実は前句の「上臈」が「女郎(蜘蛛)」に取り成されており、それによって前句の優美な雰囲気から貧しく淋しい山暮らしの景へと一変している。しかし同時にその場の景としても成立している為連接そのものは自然であり、付筋を毀損するには至っておらず、長点をかけた貞徳もその両立の巧みさを評価したと考えられる。

E いまはばくちのすたる洛中

葉ばかりの汁をもてなす町くんだり

ありはら寺へまいるよりあひ

「井筒」といふ謡に、「名ばかりハ在原寺」とうたふ。かやう

のはかなき事も、俳諧にハ取用事也。され共、あまねく人の

しらぬ事ならば不可取用云々。

(貞徳百句独吟自註・初ウ十句目)

F むつかれる子供を余りすかし佐

ふしみの雪を分る落あし

馬のくちも木幡の里にとめかねて

落足⁽⁴⁾を落馬に取なす也。拾遺人丸「山城の木幡の里に馬

ハあれどかちにてぞ行君を思へば」とよめる⁽⁵⁾余情もある

べし。「馬の口のこはき」と云秀句也。秀句ハ和歌の命とい

へ共、あまり戒力過て句毎にこのまんハあしかるべし、祇公

『隅田川』のせうそこにも秀句をさらへりとかや。それも毎

句に好める人に向て教へられたる心成べし、一向に秀句をき

らふにハあるべからず。一句斗をかざらん為の秀句ハ空しき

人の束帯したるに同じ、かばかりの事、誰かハワきまへざら

んや。(後略)

(俳諧之註・名ウ五句目)

G 白羽のやよひたつハ神垣

春かけて懐妊するやきねが姫

おもひつく身ハ白をかごと

(正章千句・第十雪・名ウ二句目)

これらの例は取成付を用いるにあたってのあるべき態度、という点に

関して示唆的である。Eの付筋は自註の通りであるが、ここで貞徳は

「され共、あまねく人のしらぬ事ならば不可取用云々」と述べており、

人口に膾炙した文句に依らねばこのような取成付は許容されない、と

戒めている。Fは「馬のくちもこは―木幡」という秀句を含んだ用例

であるが、やはり「一句斗をかざらん為の秀句ハ空しき人の束帯した

るに同じ」と述べていることが注目される。即ち、秀句自体を否定す

るものではないが、それも前句との自然な接続が前提となる。即ちこ

の場合だと「落あし―落馬」という取り成しに加えて人麿歌を踏まえ

てこそはじめて許容されるのであり、斯様な付筋を保つてこそこの秀

句は活きる、とされていたのである。EとFの検討を通して看取され

るのは、俳諧において銜学趣味に陥らないよう常に留意が必要、とい

う考え方であり、又それは俗語を積極的に用いる俳諧においては詞・

表現に対する共通理解の基盤が連歌に比してどうしても弱くならざる

を得ないため、「はかなき事」一つ用いるにも周囲に十分理解されう

るかが常に問題となった、という事情を反映してもいる。このような

事情は秀句の扱いにおいても同様で、野々口立圃も『河船付徳万歳』(承

応二年奥)⁽⁴⁶⁾の中で、

詞の秀句をのミ心にかけて付心をとりうしなひ、謎だて・こせご

とのさまをすきて人しれぬ慢心をおこすもあり。

と述べており、貞門で広く共有されていた考え方であった。付合にお

いても取成付のように句境を飛躍的に転化する手法は本質的に付筋の

把握に一定の困難を孕んでいるが故に、その運用にあたって一層の慎

重さが期されていた事は想像に難くない。

こうした考え方が実践された最たる例ともいえるのがGである。打

越―前句は玉依日売の懐妊の故事⁽⁴⁷⁾に依拠する「矢」―「懐妊」「姫」

の寄せにより付いている一方、付句では「身ハ憂―白」という秀句を

有効に活用するために前句の「きね」を「巫覡」の意から「杵」の意に取り成し、その縁として「白」⁽⁴⁸⁾を出している。ここでは秀句と取成付を互いに分かち難く結びつけて付筋を成立させつつも共通理解の基盤は担保する、という、紹巴連歌にはおよそ見られなかった非常に巧緻な技法が用いられている事が分かる。ここに高度な技巧と自然な連接を両立させようとした貞門俳諧ならではの表現意欲を見て取っても良いであろう。

このように貞門俳諧では秀句や取成付を用いる際、付筋を毀損しないための細心の注意が払われており、斯様な行き方は貞門俳諧が紹巴連歌の特徴を受け継ぎつつも先に述べ来ったような貞門俳諧特有の問題―「連歌に俗語を加て前句の詞をあらぬ品にとりなして付侍る」(誹諧初学抄)行き方を生命とするが故に、詞の意味や付筋の把握において共通理解に困難が増す―を克服するために為されたより一層の粉骨でもあった。この辺りは単に句境転化の一手段に過ぎなかった紹巴連歌においては窺えない特徴であり、その事は先に見た『正章千句』における取成付重視の行様やそれに対する点者貞徳の評価の姿勢や態度からも十分首肯される所である。

五、「取成付を宗とすべし」と「連歌のいき」の関係性

以上を総括すると、連歌においては取成付は長い間軽視されていたが、遣句中心で流れの速い紹巴連歌の時代になってようやく句境変化の重要な手段の一つと目されるようになり、その流れを受け継いだ貞

門俳諧も取成付を更に積極的に多用した。だが一方で俗語を積極的に用いる俳諧たるが故共通理解の基盤確保の重要性が増した結果、その運用にはより一層の緻密さが増した―、となる。その中には取成付によってこそ「本の事」を「面白おかしく」(『誹諧初学抄』)せしめられていた例が多々あり、又その多用により句境転化の更なる激化が図られていた点をも認めることができる。即ち貞室の「俳諧ハ取成付を宗とすべし」という発言は、紹巴連歌の行様に引き違えて貞門俳諧の行様の独自性および諧謔性を、形式として内側から保証する旨のものであったのである。しかしながら両者の行き方の差異は畢竟、一句の句作と付筋の興趣のどちらを重視するか、という相対的な関係でしかなく、それは貞徳の次の発言に集約されている。

常の連歌にハ前句に少しうとく共句がらのよきを本とす、誹諧ハ是に替ていかに一句の仕立いとよしと云とも、前句に付ぬ所あらばめでたからぬ句と思ふべし。句作縦いやしくとも、能付るを本意とす、と見えたり。

(天水抄)

これは取成付に限って述べられた文言ではないが、少なくとも貞門俳諧が積極的に後者を重視する方向を選んだ証左と言える。従来の取成付の研究においてはこうした認識に基づく把握が十分であったとは言いがたく、例えば乾裕幸氏⁽⁴⁹⁾は「四つ手付・取成付を主法とし、式目禁制を重んずるがゆえに、付合の呼吸に軽妙性を欠く貞門俳諧は、それだけにまた解放的な笑いに欠ける滑稽文学であった」とし、三・三節に述べた談林俳諧からの視座にほぼそのまま身を委ねて貞門俳諧を

一段下の「滑稽文学」として捉えているが、それは貞門俳諧の付合の方向性の選択を軽視した一面的評価と言わざるを得ない。取成付は貞門俳諧にとつて付筋の興趣を感興の中心に据えんがための重要な手法であり積極的な意義を持つものであった以上、今後はそうした見方を乗り越え、貞門俳諧の独自の行様を尊重した上で連歌や談林俳諧との連句文芸史上における関係性の再構築が俟たれる所である。その点においては本稿で採り上げた取成付のみならず、更なる多面的角度からの把握が課題となろう。

注

- (1) 本文は京都大学文学研究科図書館頼原文庫本〔請求記号：Hd1-36〕による。なお、引用に際しては通行字体に改め、私意をもって句読点・濁点等を付した。一次文献の引用については以下同じ。
- (2) 本文は『誹諧初学抄 尤之双紙』（近世文学資料類従 古俳諧編五、勉誠社、一九七三年十二月）によつた。
- (3) 宮本三郎「付合作法から見た貞門・談林の俳諧」（『国語と国文学』第三十四巻第四号、一九五七年四月）、乾裕幸「『あしらひ』考」（『国語国文』第三十五巻第九号、一九六六年九月）、両角倉一「紹巴連歌試考——二つの千句を中心に——」（『国語と国文学』第三十九巻第三号、一九六二年三月）など。
- (4) 『俳諧之註』の本文は寛永十九年刊の天理図書館綿屋文庫蔵本（分類記号・わ10-14）によつた。
- (5) このことについては、(3)に挙げた宮本論文の中で夙に指摘されている。

- (6) 本文は加藤定彦編『初印本毛吹草 影印篇』（勉誠社、一九七八年五月）によつた。
- (7) 乾裕幸「芭蕉が談林から得たもの——遣句の呼吸をめぐって——」（『連歌俳諧研究』第二十五号、一九六三年七月）。
- (8) 本文は金子金治郎編『連歌貴重文献集成』第十集（勉誠社、一九八二年十二月）によつた。
- (9) 本文は大府府立大学山崎文庫本（請求記号：ヤ81-27）による。
- (10) 斎藤義光「連歌の付合におけるやり句について」（『国語』（東京教育大学）第四巻第一号、一九五五年八月）。なお、同論文は同氏の『中世連歌の研究』（有精堂出版、一九七九年九月）に再録されている。
- (11) (10)と同文献による。

- (12) 「柳 饒別 離別川辺縮柳条」（『俳諧類松集』）。
- (13) 本文は国立国会図書館本（請求記号：一八八-27）によつた。
- (14) 本文は早稲田大学図書館伊地知鉄男文庫『連歌世々の指南』所収本（請求記号：文庫二〇〇-179）によつた。
- (15) 本文は国立国会図書館本（請求記号：一八八-334）によつた。
- (16) 「水辺用之分 水」（『無言抄』 牀用之事）
- (17) 両角倉一「宗祇連歌の研究」第四章第五節「新撰菟玖波集」の付様の一面——「とりなし付」を中心に——、一九八五年七月。なお、この節の初出は「新撰菟玖波集の連歌的表現」（『国語国文』第四十巻十号、一九七一年十月）であるが、両角氏が『宗祇連歌の研究』の「あとがき」において「旧稿と本書の記述で相違する部分については、本書のそれを採用していただきたい」と述べられているので、こちらを典拠として扱った。
- (18) 本文は北海道大学附属図書館本（請求記号：八九五・六一/KIT）によつた。
- (19) 尾形仿「軽口の俳諧（序説）」（『西鶴研究』六、一九五三年一〇月）。
- (20) 本文は京都大学文学研究科図書館頼原文庫本（請求記号：H1-161）

- によった。
- (21) 『俳諧染糸』は「むかしハ俳諧を伊勢歌と言たる」とも述べており、守武流俳諧との関連性をも自認している。
- (22) (7) と同文献による。
- (23) 本文は京都大学文学研究科図書館類原文庫本（請求記号…Hd—五）によった。
- (24) 本文は早稲田大学図書館蔵本（請求記号…へ〇五—〇二九六四）によった。
- (25) (17) と同文献による。
- (26) 本文は『長六文』金子金治郎編『連歌貴重文献集成』第六集（勉誠社、一九八一年六月）によった。
- (27) 本文は金子金治郎編『連歌貴重文献集成』第七集（勉誠社、一九八〇年一月）によった。
- (28) 本文は『新撰菟玖波集実隆本』（天理図書館善本叢書和書之部第二十卷、一九七五年三月）によった。
- (29) (17) と同文献による。
- (30) 斎藤義光「紹巴連歌の特質―貞門俳諧の先蹤として―」『国語と国文学』第三十四巻第九号、一九五七年九月。なお、この論文は同氏の『中世連歌の研究』（有精堂出版、一九七九年九月）に再録されている。
- (31) 本文は宮内庁書陵部本（請求記号…一五四・四九五）によった。
- (32) 本文は京都大学附属図書館平松文庫本（請求記号…七―シー―一五）によった。
- (33) 「筌 野王案筌（且法反和名字倍）捕魚竹筍也」（元和三年古活字版二十巻本『和名類聚抄』巻十五・漁釣具百九十四）。
- (34) 長谷川千尋「やすく」とした風をめぐって―紹巴の連歌と寄合書―『国語国文』第六十八巻第十一号、一九九九年十一月。
- (35) 同様の主張は重頼の『毛吹草』にも見える。
- (36) 本文は『俳諧独吟集二』（天理図書館綿屋文庫俳書集成第四巻、天理大
学出版部、一九九四年十月）によった。
- (37) 本文は(36)と同じ文献によった。
- (38) 本文は『俳諧独吟集二』（天理図書館綿屋文庫俳書集成第五巻、天理大
学出版部、一九九四年十月）によった。
- (39) 本文は『正章千句 紅梅千句 貞徳俳諧記』（近世文学資料類従 古俳
諧編三十九、勉誠社、一九七五年十二月）によった。
- (40) 本文は『貞門俳書集二』（天理図書館綿屋文庫俳書集成第十五巻）によ
った。
- (41) 今ここでは付句における長点を問題とするため、発句にかけられた長
点は長点数から除外した。なお、図表の中の「割合」は、長点付句中
における取成付の%を示す（四捨五入）。
- (42) 便宜上、『正章千句』において長点がかけられている句には句頭にへを
付した。
- (43) 「食物が消化しないで胃にたまる」または「前夜からの酔を翌日まで継
続する」（『日本国語大辞典第二版』）。
- (44) 「落あし」…『Vochitaxi 戦闘の際に逃走すること、または、敗北して逃
走すること』（『邦訳日葡辞書』）つまり付句は幸若『伏見常盤』の佛か
ら子連れの落ち武者の躰に転じている。
- (45) 人麿歌は「山しなのこはたの里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へ
ば」の形で『拾遺和歌集』（巻第十九・雑恋・一二四三／題しらず）に
所収。
- (46) 本文は『小町踊 下』（近世文学資料類従 古俳諧編三、勉誠社、
一九七二年六月）によった。
- (47) 『山城国風土記逸文』による。
- (48) 「杵―白」の連接が暗喩として性行為を連想させるようにはたらい
ていることも考え合わせるべきであろう。
- (49) (7) と同文献による。